

- 1 一本の長き黒髪去年今年
- 2 なのはなの花咲く前を食すなり
- 3 芹摘むや川と岸とのあはひにて
- 4 川べりにトランポリンや木の芽風
- 5 風光る自分の影をたしかめる
- 6 春暁やまなぶたのなか眼の動く
- 7 落花踏むなり象の足犀の足
- 8 なかぞらに矢車のみ残りたる
- 9 卓上にバター煌く五月かな
- 10 はつなつの紅茶を白くにごらせる
- 11 美しきパン屋の妻が蠅を打つ
- 12 青嵐観音さまの二重あご
- 13 溝浚へ始まつてゐる七時半
- 14 黴やすきものにブルーベリーと古書
- 15 噴水となるべき穴を見詰めをり
- 16 本当は何であらうか烏賊の耳
- 17 フランス革命記念日の朝寝坊
- 18 夏野菜匂はせてゐるこの地階
- 19 マネキンの被る夏帽前のめり
- 20 消火器の上の窓から夕焼ける
- 21 ががんぼはただ上がったり下がったり
- 22 鎌倉の海から山へ虹かかる
- 23 雲の峰見て喚声を上げてゐる
- 24 黄金虫わがこめかみに激突す
- 25 サイダーを飲み終へてより運転手
- 26 きらきらと翳す蜥蜴の脱ぎし皮
- 27 撫子や犬の前足一步出る
- 28 野分後タイルの目地を撫でてみむ
- 29 秋冷や目薬を目で受けとめる
- 30 天井の運ばれてゆく敬老日
- 31 秋天に海豚のやうな雲を飼ふ
- 32 長芋の新幹線のかたちかな
- 33 鉄を打つ音をはこぶや秋の風
- 34 秋なのに木蓮の絵が掛けてある
- 35 十月の自動改札から美人
- 36 灯台であるゆゑまはる秋ともし
- 37 玄関敷に冬瓜が置いてある
- 38 ゴミ処理場の温水プール小鳥来る
- 39 秋深しコーヒーといふ黒い水
- 40 あの人は熊手を持つてあらはれた
- 41 枯れ芝の色のマフラー買ひにけり
- 42 湯のなかに柚子を投げ入れたる音よ
- 43 宝石店半焼の火事ありにけり
- 44 観音の真正面なる寒さかな
- 45 ボーリング調査冬至の地中へと
- 46 餃子食ぶ旧正月も過ぎにけり
- 47 恋猫やロミオは永く生きられぬ
- 48 ずつしりと古書を買ひたき余寒かな
- 49 啓蟄や三葉虫の眼は複眼
- 50 陽炎を自転車二台横切れり

- 75 橋脚の下へと花野つづきをり
- 74 坂道を百の赤とんぼと上る
- 73 唇におむすび触れて涼新た
- 72 花火尽きてわれらの残るテラスかな
- 71 ビール色したる花火のしだるるや
- 70 ネクタイの熱帯魚めく残暑かな
- 69 風呂掃除して二分遅れる原爆忌
- 68 笑ひ合ふ蚊に喰はれたる者同士
- 67 黒髪にからめて滝を持ち帰る
- 66 うつくしきかかとをぬらす岩清水
- 65 清流をのぞきこみたる夏帽子
- 64 畦道を夏蝶のみの行き交ひぬ
- 63 食料品売場バナナの棚が空
- 62 白玉を食む子美少女とは言へず
- 61 指さきになぞる日傘の刺繍かな
- 60 背を伸ばし日除を伸ばす老店主
- 59 引越の荷に大粒の汗おちる
- 58 電柱が植田のなかに立つてゐる
- 57 包丁のきつさき錆びる緑雨かな
- 56 濁流を渡り真白きはなみづき
- 55 タラップをたんたん上り夏立てり
- 54 憲法の日の滑走路より浮き上がる
- 53 桜草ととのひ過ぎてゐる小径
- 52 花の夜のポケットにあるきびだんご
- 51 多摩川にガールスカウト達うらら
- 76 蟪蛄の雌の食ひ残しし雄か
- 77 耳搔きのうしろに羽毛ある夜長
- 78 二度とは会はず雁来紅を見てよりは
- 79 教会の前の街路樹くさひばり
- 80 秋まつり雀の影の大きくなり
- 81 毎朝に林檎食べよと母の云ふ
- 82 鍵束を落して屈むそぞろ寒
- 83 干柿の中より真の柿の種
- 84 チケットのかけらちりぢり文化の日
- 85 縞馬の剥製と居る神の留守
- 86 立冬の風鈴のある父の部屋
- 87 しぐるるや銀座を赤と黒の傘
- 88 高島屋通り過ぎたる聖夜かな
- 89 もがり笛聴きつつ凝灰岩運ぶ
- 90 バルチックチョコウザメのひげ寒に入る
- 91 手袋が缶コーヒーを受け取りぬ
- 92 寒明けの坂道上る乳母車
- 93 春の昼黒糖の香をかいである
- 94 一番薄き『山師トマ』買ひ春一番
- 95 画用紙に裏表あり春の塵
- 96 デスマスク見て永き日の坂くだる
- 97 もづく食ひけふ一日の終るなり
- 98 花の雲ひとすぢ昇る水蒸気
- 99 白猫の鼻先にある白躑躅
- 100 春宵の逆回転するシュレッダー